

## 7 「指導と評価の一体化」に向けた指導と評価の改善のポイント

「指導と評価の一体化」を実現するためには、一人一人の児童・生徒が、その児童・生徒なりに言語活動に取り組めるよう指導を工夫するとともに、その言語活動への取組状況を評価していくなど、授業の改善と評価の改善を両輪として、各学校で取組を進めていくことが大切です。

### (1) 指導の改善のポイント

ポイント  
1

#### コミュニケーションの目的や場面、状況などを明確に設定する。

「何のために、どのような場面で、誰に、何を」伝えるかが明確になることで、**児童・生徒が思考・判断し、伝える内容と使用する英語表現を決める**ことができます。「思考力、判断力、表現力等」の育成に向けて、「目的や場面、状況など」を明確にし、児童・生徒に示しましょう。

「中学校学習評価資料」  
P80 参照



#### 「コミュニケーションの目的や場面、状況など」の例

英語の授業で、初めて会う ALT の先生に、自分のことをよく分かってもらえるよう、何を伝えたらよいかを考えて自己紹介をする。(中学校第1学年1学期の場合)

ポイント  
2

#### 言語活動を通して指導する。

言語活動に繰り返し取り組ませながら、**表現内容の適切さ（内容面）と英語使用の正確さ（言語面）**について継続して指導します。1単位時間の指導においても、単元や学期、年間を通じた指導においても、「**言語活動を通して指導する**」ことが重要です。例えば「話すこと」の活動であれば、「コミュニケーションの目的や場面、状況など」に応じて、「何を話すか」と「それを英語でどのように表現するか」を児童・生徒に思考・判断させていくことが大切です。

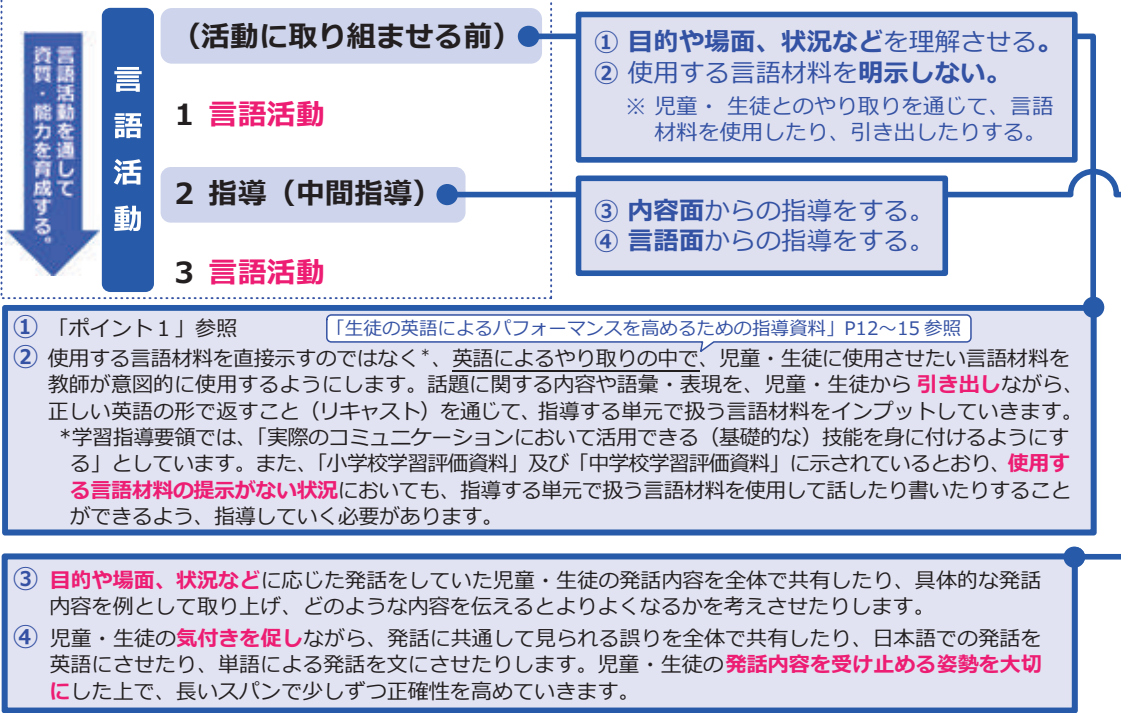
#### 「言語活動」とは

**実際に英語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合う活動**であり、「知識及び技能を活用し、思考力、判断力、表現力等を育成するために取り組ませるもの」です。

「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック」  
(文部科学省 平成29年6月) などより作成

#### 【1単位時間における指導例のイメージ】

※単元や学期、年間を通じた指導においても同様です。



ポイント  
3

#### 単元のゴールに向かって段階的に指導する。

単元の終末に取り組ませる言語活動と同様の言語活動に、単元の第1時から、単元を通じて繰り返し取り組ませます。その際、扱う話題の範囲を徐々に広げたり、使用する言語材料を増やしたりするなど、**段階的に表現する内容の質を高めていく**ことが大切です。

#### 段階的な指導の例

例えば、**本資料P10 中学校「書くこと」の事例**では、「モデル文を参考に書く→情報を書き加える→教科書本文等を参考にしながら自分で英文を書く→目的や場面、状況などに応じて自分でまとまりのある英文を書く」のように、表現させる範囲を段階的に広げ、その質を高めています。

ポイント  
4

振り返りを通じて、児童・生徒が自己調整を図ることができるように促す。

各時間・単元の**目標を達成できたかという視点で振り返らせる**ことが大切です。最初から自由記述で振り返らせるのではなく、「～できましたか」というチェックリストの形で振り返りをさせることも考えられます。

なお、振り返りをさせる際には、「**自己調整を図っていると考えられる児童・生徒の姿**」を、教師が事前にイメージしておくことが大切です。

「自己調整を図っている児童・生徒の姿」の例

例えば、「話すこと [やり取り]」では、「聞き手を意識して、表現を変えるなど言い直ししながら伝え合っている。」姿が、「話すこと [発表]」では、「聞き手を意識して、話す内容や話し方を工夫している。」姿が考えられます。

「中学校学習評価資料」P82 参照

## (2) 評価の改善のポイント

ポイント  
1

「表現の領域」・「理解の領域」と3観点との関係を理解する。

単元末の言語活動、パフォーマンステストやペーパーテストなど、「**記録に残す評価**」の場面においては、以下に示す『「表現の領域」・「理解の領域」と3観点との関係』を踏まえた上で評価を行うことが重要です。

「表現の領域」(「話すこと」「書くこと」と3観点との関係 (小学校・中学校共通))

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
英語使用の <b>正確さ</b> を評価	表現内容の <b>適切さ</b> を評価	基本的に「 <b>思考・判断・表現</b> 」と <b>一体的</b> に評価

※基本的に、1回のパフォーマンステスト等において**3観点を一体的に評価**します。

「理解の領域」(「聞くこと」「読むこと」と3観点との関係 (中学校の場合))

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
英文の <b>内容を聞き取って/読み取っているか</b> を評価	<b>必要な情報、概要、要点</b> を捉えているかを評価	基本的に「 <b>思考・判断・表現</b> 」と <b>一体的</b> に評価

※基本的に、1回のペーパーテスト等において「**知識・技能**」と「**思考・判断・表現**」は**別々に評価**します。

小学校の「聞くこと」「読むこと」については、「**小学校学習評価資料**」事例1、事例4参照



ポイント  
2

「思考・判断・表現」と「主体的に学習に取り組む態度」の関係を理解する。

単元の評価規準では、3観点のうち「**思考・判断・表現**」と「**主体的に学習に取り組む態度**」は**基本的には一体的に評価**することとしています。右の例では、これら二つの観点の評価規準を対の形(文末のみ異なる形)として設定しています。

単元の評価規準の例 (小学校第6学年「書くこと」の場合)

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
(省略) 「小学校学習評価資料」P70参照	相手によりよく分かってもらえるように、日本の行事や食べ物、自分の好きな日本文化などについて、音声で十分に慣れ親しんだ語句や表現を用いて、 <b>考えや気持ちなどを書いている。</b>	相手によりよく分かってもらえるように、日本の行事や食べ物、自分の好きな日本文化などについて、音声で十分に慣れ親しんだ語句や表現を用いて、 <b>考えや気持ちなどを書こうとしている。</b>

基本的には「一体的に評価する」理由

- 「**主体的に学習に取り組む態度**」は、「**外国語の背景にある文化に対する理解**」を深め、小学校では「**他者**」に、中学校では「**聞き手、読み手、話し手、書き手**」に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとしている状況の評価するものであること。
- 「**思考・判断・表現**」の評価規準には、コミュニケーションを行う目的や場面、状況などを必ず含むものとしており、目的や場面、状況などに応じたコミュニケーションを図ろうとするためには、「**外国語の背景にある文化に対する理解**」や「**他者**(聞き手、読み手、話し手、書き手)」への配慮が必要であること。

二つの観点は密接に結び付いている。

ポイント  
3

「主体的に学習に取り組む態度」の評価について理解する。

「主体的に学習に取り組む態度」では、「**自己調整を図った結果、態度となって表出した言語活動への粘り強い取組**」の状況を評価します。これは、「**思考・判断・表現**」と基本的には一体的に評価しつつ、言語活動への取組状況、ワークシート等における**振り返りの記述を参考に評価**するということです。

「振り返りの記述を参考に評価する」ことの例

学期末等の総括の段階で、「b」と「c」のどちらもあり得る場合に限り、**振り返りで記述している内容が、授業における言語活動の取組の様子にいくらかでも実際に表れていれば**、「**思考・判断・表現**」と一体的に評価した結果「c」であった場合でも、「c」ではなく「b」と総括することも考えられます。